

賽(さい)は投げられた

校長 夏目 利江子

日頃より、本校の教育活動にご協力とご理解を賜り、心より感謝申し上げます。
長沼高校には、多くの芸術的な空間が存在します。私はオレンジ色に染まった放課後の教室が大好きです。今年度も素晴らしい生徒の皆さんと長沼高校での生活を共にしながら、地域の皆様とともに歩んで参ります。保護者の皆様方におかれましても、引き続き今までどおり、ご支援を賜りたく、どうぞよろしくお願いいたします。

さて、突然ですが、『賽(さい)は投げられた』が、今の私の心境です。え？何それ？ですよ。その通りです、何それです。

では、これについて私なりの思いをお伝えしたいと思います。この意味は、「一端決断した以上、最後までやりぬくしかない。」「いったん乗り出してしまった以上、もはや最後までやるより他に道はない。」「もはや運命に向かって事は進み始めたのであり、後退はできない。」「もう、回帰不能点を超してしまったので、最後までやるしかない。」などの解説が見つかりました。そもそも、これは、古代ローマのカエサルという言葉です。その昔、ガリア総督だった彼は対立するポンペイウスと闘うため軍隊を率いてローマに向かったそうです。当時の法律では、ローマの北方を流れるルビコン川を自らの軍隊を率いて渡るとは禁じられていました。カエサルは、その法律を無視して進軍を続けたそうです。「賽は投げられた」と言いながら。ルビコン川を渡るとき、カエサルに不安はなかったのでしょうか？後に続く兵隊の気持ちも揺ぎがなかったのでしょうか？その後、4年の時間をかけて、その内乱を制し、カエサルはローマに覇権を唱えることになるのです。サイコロを投げた瞬間は、どんな目が出るかはわかりません。カエサルもきっと、ルビコン川を渡るときには、勝つか負けるか、どうなるか、わからなかったことでしょう。それでも、カエサルが「後には引けない、皆もついてきてほしい。」という、強い決意を持っていたことが感じられる言葉です。確かに、重大なことを始める際に決意を示すのにピッタリという言葉です。

別に私は、これから何の戦いを始めるわけではありませんし、そんなにおおげさな事件をかかえているわけではありません。でも、何か、これに惹かれます。それはきっと、私が東日本大震災を経験しそれが元となり、学校の管理職となってから今までずっと、心のどこかにしまっておいた言葉かもしれません。それは、「いったん自分が決断して行動を始めた以上、最後までやり抜くしかない。」という気持ちが、いつもあるからです。

今年の令和3年度、長沼高校を名乗る最後の年。偉大な歴史と伝統を引き継いで、新しいステージにバトンを渡す役目を担う私達長沼高校教職員にとって、まさに「賽は投げられた」のです。最後まで大切な生徒を守りながら、今見える向こう側の美しい川岸にたどりつけるよう、教職員一同、精一杯努力いたしますので、引き続き、変わらぬご支援とご協力をよろしくお願いいたします。